

科学技術・学術審議会 情報委員会（第 11 回）における主な意見
（学術分科会における提言案関係）

1. コロナ新時代における学術研究振興の必要性について
 - ・今回のような非常事態で顕在化した、大学の研究をサポートする事務機構に求められる体力の実質化といった課題を踏まえ、大学の事務機構等に対する財政的な支援も視野に入れた目配りが必要である。
 - ・新しいものを見出して育てていくようなバランスのとれた学術振興は、どの分野においても重要で担保されるべきものであり、それを議論する学術分科会と、情報委員会が合同で提言を出すことについては情報分野の振興を担当する側としても同意するところである。

2. 大学等における研究体制について
 - ・多様なアーカイブが構築されているところであるが、例えば国文学研究資料館が所蔵する資料のデジタルアーカイブ化は、従来国内に閉じていた国文学を海外にも開かれたものにする取組であり、学術の広がりや振興する契機となる活動として評価できると思う。
 - ・情報科学技術を用いる研究等を推進していく議論のなかにおいて、いわばリアルの研究が中心の研究の存在も踏まえ、リアルとバーチャルの適切な組み合わせ方についても論点としておさえておく必要がある。
 - ・在宅勤務の普及などの社会の変化に伴い、研究者のライフスタイルやキャリアパスの転換についても議論すべきではないか。

3. その他
 - ・情報委員会が取り扱う議論には、情報科学自体の振興という視点（「of IT」）と、全ての学問分野等を支える基盤としての情報科学の活用という視点（「by IT」）の 2 つがあり、後者の強化のためには前者の世界に伍する取組が不可欠であるということ提言の中でしっかり位置づけてもらいたい。